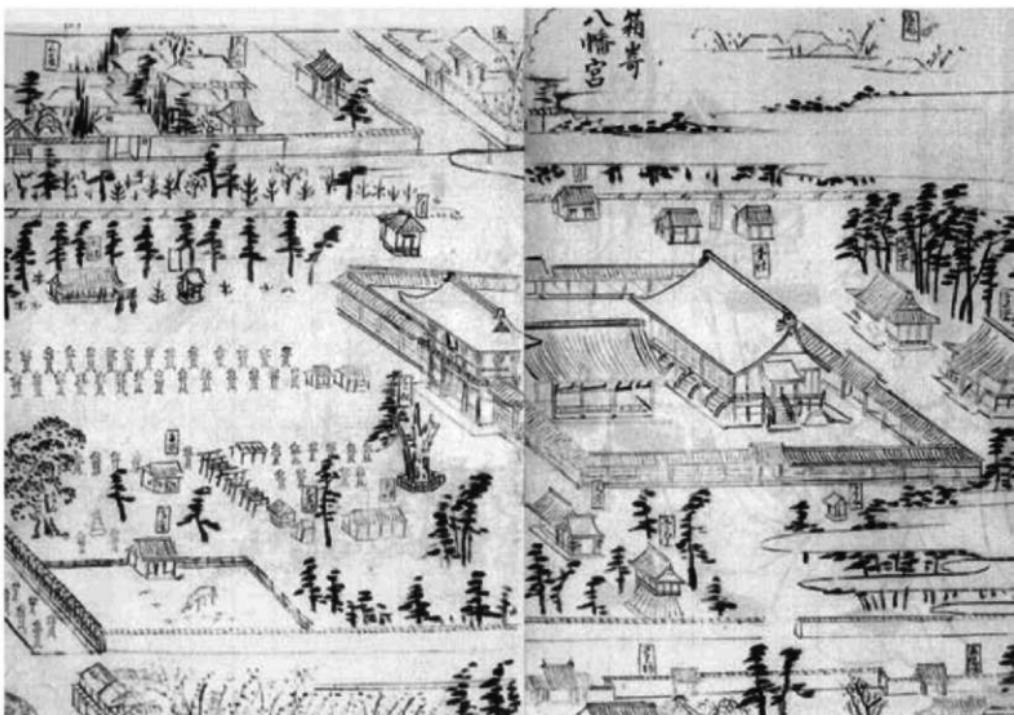


# 箱崎 19

- 箱崎遺跡第29次・31次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第813集



2004

福岡市教育委員会

# 箱崎 19

## -箱崎遺跡第29次・31次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第813集



2004

福岡市教育委員会



## 序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市には、有形・無形の優れた文化財が数多く残されております。これらの文化財は、先人が築き上げてきた福岡の歴史と文化を理解する上で欠くことのできない貴重なものです。本市ではこれらを踏まえ、昭和 48 年に福岡市文化財保護条例を制定するとともに、多岐にわたる文化財を保護・活用してまいりました。

その一方で、近年の都市開発による歴史的環境の変化には著しいものがあります。本市教育委員会では新たな開発に先立ち、事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本報告書は、共同住宅建設に伴い調査を実施した箱崎遺跡第 29 次調査と第 31 次調査の成果を報告するものです。申すまでもなく箱崎地区は芭崎八幡宮の門前町として発展してきました。今回の調査では、主に鎌倉時代から室町時代の集落跡を確認し、輸入陶磁器など多數の貴重な遺物が出土しました。また、13世紀後半の焼土層と整地層が検出され、元寇の戦場となった中世芭崎の一端を示す資料として今後の検討が待たれます。

今後、本書が文化財への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として、内外で活用していただければ幸甚に存じます。

末尾になりましたが、発掘調査から本書の作成にいたるまで、費用負担などさまざまな面で多大なご協力をいただきました柴田誠様、梅津敏行様をはじめ、調査にご理解をいただきました箱崎地区の住民の皆様等関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成 16 年 3 月 31 日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

## 例　　言

- 1 本書は、福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、福岡市東区箱崎3丁目2398・2440と、箱崎3丁目3358-1地内において発掘調査を実施した箱崎遺跡第29次調査と同第31次調査の報告書である。
- 2 調査記録の作成および整理分担は、次の通りである。  
遺構実測……………松浦一之介・城門義廣（九州大学学生）  
遺物実測……………松浦一之介  
遺構写真撮影……………松浦一之介  
遺物写真撮影……………井上蘭子  
遺物復元……………木下久美子・田中由紀・藤あい子・宮崎由美子・矢川みどり  
金属製品保存処理……比佐陽一郎・片多雅樹（福岡市埋蔵文化財センター）  
製図……………松浦一之介・木下久美子・宮崎由美子  
写真現像焼付……………（有）ダイドーカメラ  
本文執筆……………松浦一之介
- 3 本書で使用した方位は磁北であり、座標は国土調査法第Ⅱ座標系に據る。また、標高は東京湾平均海面高度（T.P.）に據る。
- 5 本書で使用した地図は、国土地理院発行の「1/50,000 福岡」、福岡市発行の福岡市都市計画図を原図としている。
- 6 本書で使用した遺構の略号は、奈良文化財研究所の用例に據る。
- 7 本書で記述する輸入陶磁器の分類・説明については、次の文献を参考にした。  
・横田賛次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」  
　　『九州歴史資料館研究論集 4』1978年  
・太宰府市教育委員会「付編・土器の分類」「大宰府条坊跡II」1983年
- 8 本書に関する記録・遺物等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 9 本書の編集は、松浦一之介が行った。

# 目 次

## 第1章 はじめに

### 1 調査にいたる経緯と調査体制

- (1) 第29次調査
- (2) 第31次調査

## 第2章 遺跡の位置と歴史的環境

## 第3章 第29次調査の記録

### 1 調査の概要と順序

### 2 遺構と遺物

- (1) 土壙 (SK-003、004、011、017、025)
- (2) 性格不明遺構 (SX-001、002、006、016)
- (3) その他の出土異物

### 3 小結

## 第4章 第31次調査の記録

### 1 調査の概要と順序

### 2 遺構と遺物

- (1) 井戸 (SE-002)
- (2) 土壙 (SK-001、009、074)
- (3) その他の遺構と遺物

### 3 小結

## CONTENTS

### I Prologue

#### 1 Introduction

### II The Location and Historical Environment around the Site

### III Excavation at the Hakozaki Site; No.29

#### 1 Outline of the research and stratigraphy

#### 2 Structural remains and artifacts

#### 3 Summary

### IV Excavation at the Hakozaki Site; No.31

#### 1 Outline of the research and stratigraphy

#### 2 Structural remains and artifacts

#### 3 Summary

背景写真 箱崎29次調査地点と箱崎旧上小寺町（大学通り）の町家

安政絵 「箱崎八幡宮」 奥村玉蔵「筑前名所圖繪」より

# 図版目次

第1図 箱崎遺跡位置図（縮尺 1/50,000）

第2図 箱崎遺跡調査区位置図（縮尺 1/5,000）

第3図 第29次・31次調査区位置図（縮尺 1/1,000）

## 第29次調査

第4図 第29次調査区遺構配置図並びに北壁土層断面図（縮尺 1/100）

第5図 東半調査区全景（東から）

第6図 西半調査区全景（東から）

第7図 SK-003、004、011、015、017、025、SX-001、006、016 実測図及び土層断面図（縮尺 1/40）

第8図 各遺構出土遺物実測図（縮尺 1/3）

第9図 SX-002 性格不明遺構（北から）

第10図 SK-011 土壁全景（南から）

第11図 SX-016 性格不明遺構（南から）

第12図 SX-002 実測図及び出土遺物実測図、銅錢拓影（縮尺 1/40、1/3、1/1）

第13図 ピット及び遺構検出面出土遺物実測図（縮尺 1/3）

## 第31次調査

第14図 第31次調査区遺構配置図及び土層断面図（縮尺 1/100、1/50）

第15図 南半調査区南壁及び西壁土層（東から）

第16図 北半調査区全景（南から）

第17図 南半調査区全景（北から）

第18図 SE-002 井戸検出状況（南東から）

第19図 SK-001 土壁全景（南東から）

第20図 SK-009 土壁全景（西から）

第21図 SK-001、009、074、SE-002 実測図及び土層断面図（縮尺 1/40）

第22図 SE-002 井戸出土遺物実測図（縮尺 1/3）

第23図 SE-002、003 井戸出土遺物実測図（縮尺 1/3）

第24図 SK-001 土壁出土遺物実測図（縮尺 1/3）

第25図 SK-001 土壁出土遺物実測図（縮尺 1/3）

第26図 SK-009 土壁出土遺物実測図（縮尺 1/3、1/4）

第27図 その他の遺構及び包含層・試掘溝出土遺物実測図（縮尺 1/3、1/1）

## 遺物写真

第28図 青磁輪花小碗（南宋龍泉窯 156）

第29図 青磁刻花文碗（南宋龍泉窯 88）

第30図 青磁無縫蓮弁文碗（南宋龍泉窯 135）

第31図 青磁無縫蓮弁文碗（南宋龍泉窯 136）

第32図 「金玉満堂」銘青磁印花文碗（南宋龍泉窯 157）

第33図 青磁刻花文皿（南宋龍泉窯 142）

第34図 青磁魚文皿（南宋龍泉窯 158）

第35図 青磁皿（高麗 82）

# 第1章 はじめに

## 1 調査にいたる経過

### (1) 第29次調査

平成13年8月23日、柴田誠氏より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課に対して、同市東区箱崎3丁目2398・2440における個人住宅兼共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受けて教育委員会埋蔵文化財課では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれていることから、試掘調査を実施し、土壌・ピット等の遺構を確認し、輸入陶磁器等の遺物を発見した。この試掘調査の成果をもとに申請者と埋蔵文化財課は協議を行ったが、申請地の内、新築部分の150m<sup>2</sup>については工事に伴い遺構の破壊が回避できないため、その箇所を対象とした記録保存のための本調査を実施することとなった。平成14年3月8日、委託契約を締結し、平成14年4月1日から同年同月26日迄発掘調査を実施した。

### (2) 第31次調査

平成14年3月12日、梅津敏行氏より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課に対して、同市東区箱崎3丁目3358-1の一部における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受けて教育委員会埋蔵文化財課では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれていることから、平成14年4月22日に試掘調査を実施し、ピット等の遺構を確認し、輸入陶磁器等の遺物を発見した。この試掘調査の成果をもとに申請者と埋蔵文化財課は協議を行ったが、申請地の内、新築部分の198.46m<sup>2</sup>については工事に伴い遺構の破壊が回避できないため、その箇所を対象とした記録保存のための本調査を実施することとなった。平成14年5月8日、委託契約を締結し、平成14年5月9日から同年6月14日迄発掘調査を実施した。

## 2 調査の組織

調査委託：第29次調査 柴田誠

第31次調査 梅津敏行

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括：埋蔵文化財課長 山崎純男

同課調査第2係長 力武卓治（前任）田中春夫（現任）

調査庶務：文化財整備課 御手洗清

調査担当：同課調査第2係 松浦一之介（現 同課調査第1係）

調査作業：近藤澄江 草場恵子 田中雅子 福田操 本郷満子 村田敬子 吉村智子

城門義廣（九州大学学生）

尚、発掘調査から報告書作成に至るまで柴田誠氏、梅津敏行氏をはじめ、地域住民等関係者各位には多大な御協力と御理解を頂いた。記して謝意を表する次第である。

## 第2章 遺跡の位置と歴史的環境

海の中道によって外海である玄界灘から隔てられた博多湾の沿岸には、箱崎砂層と呼ばれる新砂丘砂層が形成されている。この層は、東区貝塚から早良区の室見川河口に達し、現在の福岡都心域と重複する。この層の形成時期は、少なくとも縄文時代晩期を下らないとする自然科学的知見が得られている。尚、海の中道を形成する海の中道砂層も箱崎砂層と同様、いわゆる新砂丘砂層であり、形成時期は完新世である。

箱崎遺跡はこの砂丘の北端部分に立地する。箱崎砂層の後背部には、これより古い時期に形成された沖積地である広義の福岡平野が広がる。内、箱崎遺跡の後背部は、多々良川とその水系である須恵川・宇美川流域の柏屋平野である。以下、古墳時代からの歴史的環境について概観する。

箱崎遺跡は、これまで42次にわたる発掘調査が実施してきた。これまでの調査で最も古い遺物は第6次調査出土の磨製石斧や第20次調査出土の刻目突帯文瓦片である。縄文時代晩期から弥生時代初頭の所産と考えられるが、後世の造構からの出土である。古墳時代の造構としては、第8・20・22・26・30次調査等で竪穴住居址や周溝墓、壺棺墓等が検出されている。これらは主に前期の所産であるが、中・後期の造構及び遺物も散見される。これら古墳時代の集落及び墓地群は、何れも本遺跡が位置する砂丘の東側緩傾斜面上に立地していることから、集落形成の際に比較的安定した自然環境を選択したものと推定されている。

これ以降、筥崎宮創建の10世紀までの明確な造構は、現在確認されていない。

10・11世紀代の造構は筥崎宮の南東側の調査区、即ち2・9・12・22・26・30次調査で確認されている。更にこれまでの調査の成果から、12世紀中頃以降、西側の緩傾斜面が集落として利用され始め、後半には遺跡の広範囲で集落が確認されている。また遺跡の南西側、短冊形の屋敷地に沿った第13次調査では、15世紀代の町屋の構造を示す造構配置が確認され、箱崎地区の町割りを考察する上で貴重な資料である。

この箱崎遺跡発展の契機となった筥崎宮





▲第2図 箱崎遺跡調査区位置図（縮尺1/5,000）

第2章遺物の位置と歴史的環境

の創建は、延喜 21 (921) 年の大宰府総世音寺巫女に八幡大菩薩の託宣があり、延長元 (923) 年に筑前都波郡大分八幡宮を遷座したものと伝えられる。これは“異賊之来寇”即ち新羅来寇の祈禱と、大宰府官人層による対外交渉の拠点とする目的が大きいと考えられる。今昔物語集本朝編巻 26 - 16 は、11 世紀初頭に貿易によって利潤を得た菅崎宮神人泰定重と中央推進との結び付きを活写している。尚、「菅崎津」と呼ばれる同宮の港湾施設は、宇美川が砂丘に航行する同宮の後背部にあったものと推定されている。保延 6(1140) 年、菅崎宮は神人らの盜行がもとで香椎宮とともに大宰府領となる。また仁平元 (1151) 年、大宰府検非違所別当安清らが 500 余騎を率いて、菅崎・博多で大追捕を行い宋人王昇後家をはじめ 1600 家の資財を運び去った際、菅崎宮にも乱入し、神宝を強奪している。菅崎宮の創建以降、神宮寺や今山別所などの宗教施設が建ち並んでいた他、博多に連続してかなりの規模の宋人居留街ができていたものと考えられる。

文永 11 (1274) 年の役で菅崎宮は焼失しているが、その後も數度にわたって焼失した。14 世紀前半に元・慶元府（今の鹿児島）を船出し、日本への航行中、現在の韓国全羅南道新安沖に沈没した貿易船の引揚げ資料には「菅崎奉加銭」銘の木簡があり、当該期の交易拠点の一つであったことが想起される。

箱崎遺跡は、北側の箱崎地区と南側の馬出地区に跨るが、前者は糟屋郡、後者は那珂郡に属した。但し、箱崎が糟屋郡に属するのは中世後半以降と考えられている。和名抄によれば律令期の糟屋郡は、香椎、志珂、厨戸、大村、池田、安曇、作原、勢門、敷栗の 9 郷を所管する中郡であり、那珂郡は田来良久、日佐、良久、海部、三宅、山口、板曳、中嶋の 8 郷を所管する中郡である。両郡の郡境は席田丘陵から御手洗、下白井を経由して菅崎宮の南側を通り博多湾岸に抜ける。



▲第3図 第29次・31次調査区位置図(縮尺 1/1,000)

## 第3章 第29次調査の記録

### 1 調査の概要と基本層序

第29次調査区は、東区箱崎3丁目2398・2440に所在し、箱崎遺跡が立地する古砂丘上の北端部に位置する。北側約50mには押宗寺院勝樂寺が、また南側約550mには菖宮が鎮座する。本調査区から約30m北側では第23次調査が実施された。調査前の現状は個人専用住宅解体後の更地であった。調査面積は80m<sup>2</sup>である。

第4図右は、調査区北壁の土層を記録したものである。この砂層面は調査区北西端部と南東端部で標高2.6mを測り、ほぼ平坦である。また、箱崎遺跡における基盤砂丘の地形復元図では、周辺の等高線は標高2.5~3.0mが想定されており、本調査区は砂丘北側の西側傾斜面に立地すると考えられるが、本調査は箱崎遺跡の鞍部の一角である可能性が考えられる。

基本層序はその砂丘上面に東側で黒褐色砂質土(4層)、黒褐色(色調他層に比べ暗い)砂質土(3層)、茶褐色砂質土(2層)、瓦礫を含む近・現代の客土が堆積する。土層観察で遺構は地山、4層、2層から掘り込まれている。3層から掘り込まれる遺跡の有無は判別できなかった。今回の調査では黄褐色砂層上面での1面の調査を実施した。数ヶ所の攪乱が認められたが、12世紀中頃から13世紀を主体とし、15世紀初頭に至る遺構を確認した。

### 2 遺構と遺物

#### (1) 土壙 (SK)

##### SK-003 (第7図上)

調査区西半で検出した。切り合い関係はSK-011・015土壙を切り、SX-002性格不明遺構に切られる。検出面での平面形は、長辺約0.8m×短辺0.7mを測る隅丸方形を呈すると考えられる。検出面からの深さは約0.5mを測る。

##### 出土遺物 (第8図)

1は底部糸切り離しの土師器皿で、復元口径8.8cm、器高1.1cm。胎土に白色細沙、黒色・茶褐色

細粒を含む。20は白磁皿類の底部片で、見込みの釉薬が輪状に掻き取られ、白色耐火土目が残る。色調黄みの明るい灰色。21は白磁碗類の底部片。釉調透明度低く、色調灰みの白。

出土遺物から、SK-003の年代は12世紀後半代と考えられる。

##### SK-004 (第7図上)

調査区西半で検出した。切り合い関係はピットを切る。検出面での平面形は、長さ0.9m×幅0.5~0.6mを測る隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは約0.5mを測る。

##### 出土遺物 (第8図)

12、13は白磁碗V類もしくはVI-1類と考えられる口縁部片である。胎土白色を呈し、黒色細粒を含む。色調は順に黄みの白、生成色。14は白磁碗IV類の口縁部片である。胎土軟質で黒色細粒を含む。色調は生成色を呈す。

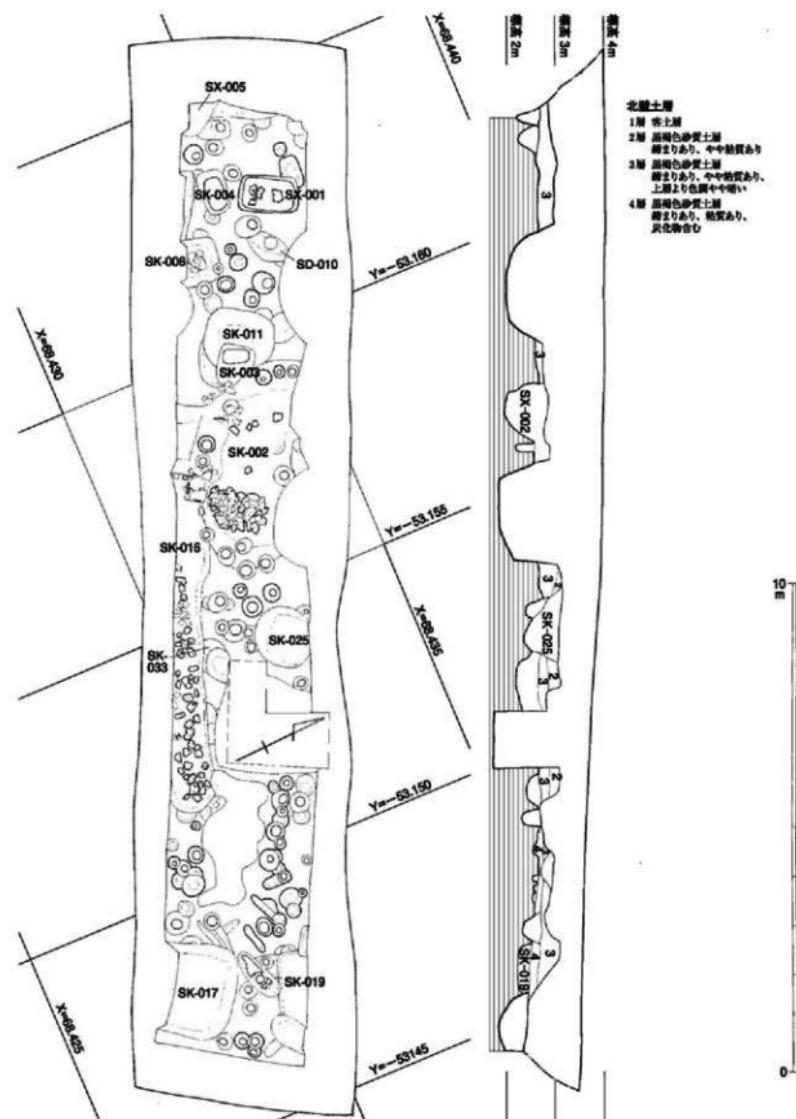
出土遺物から、SK-004の年代は12世紀代と考えられる。

##### SK-011 (第7図下)

調査区西半で検出した。切り合い関係はSK-015土壙、ピットを切り、SK-003土壙、SX-002性格不明遺構に切られる。検出面での平面形は、長辺約1.5m×幅1.2m程度の隅丸長方形を呈すると考えられる。検出面からの深さは約0.5mを測る。覆土は黄褐色砂質土と黒褐色粘質土の互層状に堆積しており、廐棄土壙と考えられる。

##### 出土遺物 (第8図下)

26は施釉陶器小壺の底部片で、胎土銀灰色を呈し黒色細粒を含む。外器面に薄く施釉され、色調セージグリーン~生成色。27は青白磁合子で立ち上がり径4.8cm、合口径5.6cmに復元。胎土白色を呈し精良で、色調は緑みの白。28は底部回転糸切り離しの土師器皿で復元口径9.0cm、器高1.0cm。29は底部回転糸切り離しの土師器坏で、口径18.0cm、器高3.0cm。30、31、34は白磁碗V類で、見込みの釉薬が輪状に掻き取られる。32



▲第4図 第29次調査区査点配置図並びに北壁土層断面図（縮尺1/100）

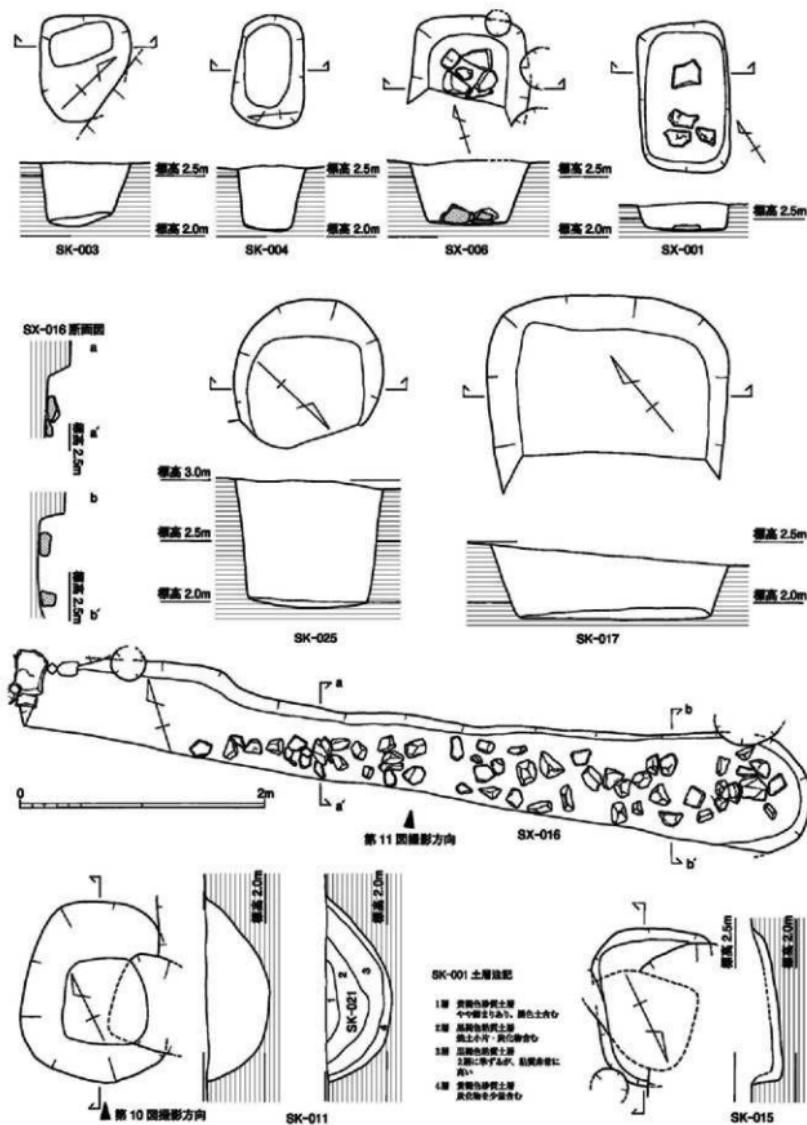
▼第5図 東半調査区全景（東から）

西半調査区の作業が終了した後の4月13日から東半調査区の調査を開始した。図左下にSK-017土壌、左上にSX-016性格不明遺構が位置する。

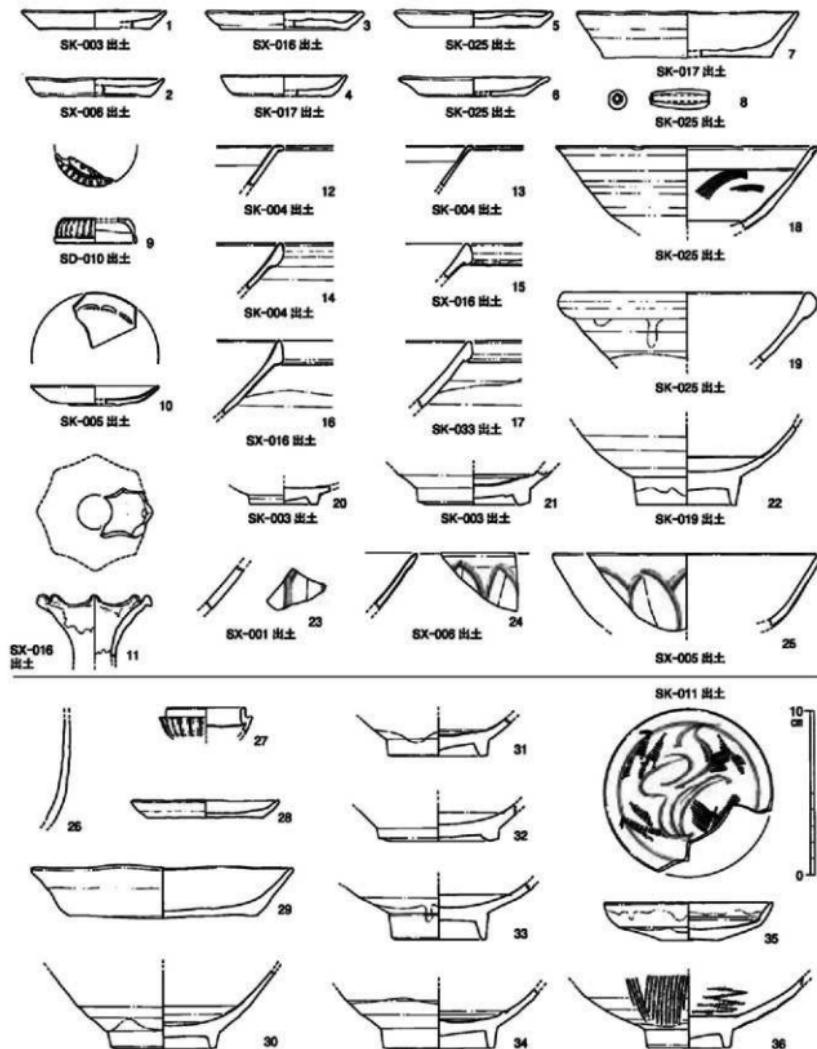


▲第6図 西半調査区全景（東から）

第29次調査は西半調査区から開始し、4月13日に反転した。図下半がSX-002性格不明遺構、上半にSX-001、006性格不明遺構、SK-004土壌等が位置する。



▲第7図 SK-003、004、011、015、017、025、SX-001、006、016 実測図及び土層断面図（縮尺 1/40）



▲第8図 各遺構出土遺物実測図 (縮尺1/3)

は白磁碗IV類、33は白磁碗V類。35は同安窯系青磁皿I-1類で口径10.3cm、器高2.3cm。見込みにヘラ書きの雲文と「之」字形櫛描文を施文。色調はベージュ。36は同安窯系青磁碗。外器面に櫛描文、内器面に「之」字形櫛描文を施文し、色調はベージュ。



▲第9図 SX-002 性格不明遺構（北から）

出土遺物から、SK-011の年代は12世紀後半代と考えられる。

#### SK-017（第7図中）

調査区東南端で検出した。南半は調査区外に延びる。ピット・溝状遺構を切る。平面形は幅約2.0mの隅丸方形もしくは長方形と推測される。検出面からの深さは約0.5mを測る。

#### 出土遺物（第8図）

4は底部糸切り離しの土師器皿で、口径9.6cm、器高1.0cmに復元される。7は底部回転糸切り離しの土師器皿で、口径13.5cm、器高2.8cmを測る。

出土遺物から、SK-017の年代は13世紀前半代と考えられる。

#### SK-025（第7図中）

調査区のはば中央で検出した。北側は調査区外に延びる。切り合い関係はピットを切る。検出面での平面形は、幅約2.0mの隅丸方形もしくは長方形を呈すると推測される。北壁の土層観察から、SK-025は標高約3.0mの2層（茶褐色砂質土層、第4図参照）から掘り込まれていることが判る。深さは約1.0mを測る。

#### 出土遺物（第8図）

5、6は底部糸切り離しの土師器皿で、法量は順に口径7.6cm、9.2cm、器高1.3cm、1.2cmに復

元される。8は管状土錐で、長さ3.6cm、径1.1cm、孔径0.4cmを測る。胎土に白色・黒色繊維を含み、色調は赤みの灰を呈す。18、19は順に白磁碗V-4・b類、IV類である。

出土遺物から、SK-025の年代は14世紀後半代と考えられる。

#### (2) 性格不明遺構

##### SX-001（第7図上）

調査区の西端部で検出した。切り合い関係はSK-007を切る。検出面での平面形は長さ1.2m×幅0.7mを測る隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは0.2mを測り、覆土は灰褐色粘質土と砂質土の小ブロックを含んだ砂質土が堆積していた。底部には長さ15～20cm程度の薄い石材が4枚敷かれていた。

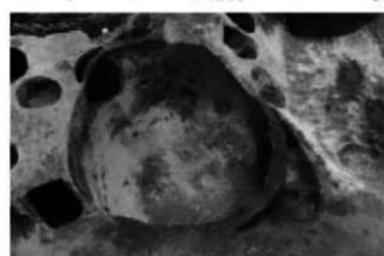
#### 出土遺物（第8図）

23は龍泉窯系青磁碗I-5・b類である。

出土遺物から、SX-001の年代は13世紀前半代以降と考えられる。

##### SX-002（第9、12図）

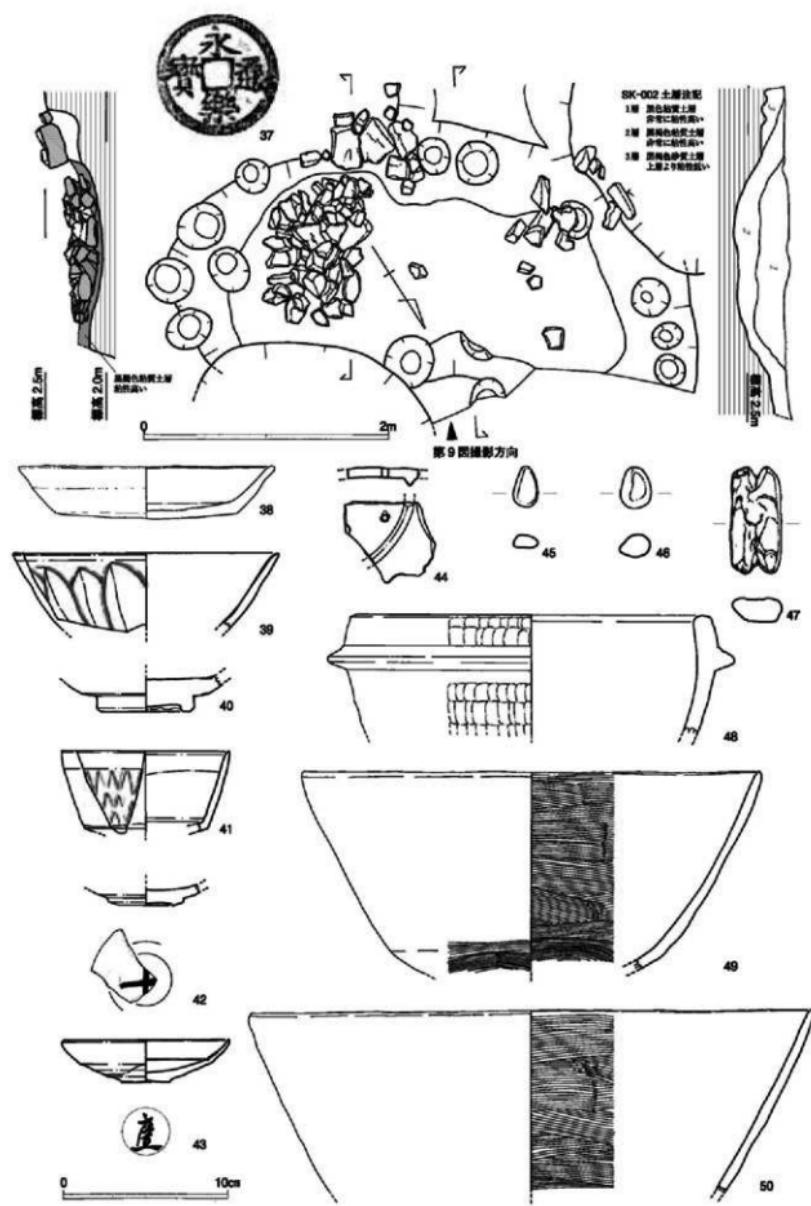
調査区のはば中央で検出した。切り合い関係はSK-003・011・015土壤、SX-016性格不明遺構を切り、近・現代の擾乱に切られる。平面形は不整形な形状を呈し、検出面からの深さは最も深いところで0.4mを測り、浅い皿上を呈する。東西幅3.8mを測る。北側の中央部は立ち上がり、その両側で遺構が調査区外に延びる。南側はやや浅いが、覆土が同一であり遺構の切り合いを見逃した可能性も考えられる。覆土は非常に粘質の高い黒褐色土が堆積していた。また底部東側には



▲第10図 SK-011 土壌全景（南から）



▲第11図 SX-016 性格不明遺構（南から）



▲第12図 SX-002 実測図及び出土遺物実測図、銅錢拓影（縮尺1/40、1/3、1/1）

10～35 cm程度の礫が敷き詰められ、地山との間に粘質の高い黒褐色土が厚さ5～10 cm程度貼られていた。縁辺部には10～40 cm程度の礫が部分的に置かれ、石材が置かれない部分には50 cm前後の間隔でピットが環状に検出された。

底部に石材が敷き詰められていない状況から断定はできないが、検出状況から池状造構など苑池等の施設の一部であった可能性が考えられる。

#### 出土遺物（第12図下）

37は明代の銅錢「永樂通寶」（初鋤年西暦1408年）。38は底部回転糸切り離しの土器器皿で、口径15.6 cm、器高3.2 cm。39は龍泉窯系青磁碗I-5・b類で色調オリーヴドラブ。40は龍泉窯系青磁碗I類の底部片で色調メロンイエロー。41は白磁香炉で口径10.2 cm、器高5.0 cm程度に復元。胎土は灰みの白を呈し黑色細粒を含む。外器面にヘラ状工具による鋸歯文を3段に施す。口縁部から外器面全体に非常に薄く施釉。釉調透明度低く、色調黄みの明灰色。42は白磁皿II類で、底部に墨書きされる。「十」か。43は白磁皿VI-1類で、底部に墨書きされるが判読できない。花押か。44は瓦器碗底部を転用した不明品で、底部に孔径約0.4 cmの穿孔がある。45、46は基石と考えられる。

45は泥緑岩製か、46は石英製。47は滑石製有滑石錠で全長6.6 cm、幅3.1 cm、厚さ1.5 cm。48は滑石製石錠で口径21.8 cmに復元。錠の断面は正台形を呈す。49、50は土錠で口径は順に28.0 cm、34.3 cm。外器面に多量の煤が付着。内器面に横方向のハケ目を施す。胎土粗く白色・茶褐色砂粒を多く含み、色調は丁字色。

出土遺物から、SX-002の埋没年代は15世紀初頭と考えられる。

#### SX-006（第7図上）

調査区西側で検出した。切り合い関係は、ピット等を切り、ピット、近・現代の井戸に切られる。検出面での平面形は長さ0.8 m以上、幅0.9 mを測る隅丸方形もしくは長方形を呈すると推測される。検出面からの深さは0.5 mを測り、SX-001と同様、底部に長さ15～30 cm程度の礫が置かれていた。

#### 出土遺物（第8図）

24は龍泉窯系青磁碗I-5・b類である。

出土遺物から、SX-006の年代は13世紀後半代以降と考えられる。

#### SX-016（第7、11図）

調査区の中央部から東側にかけて検出した。切り合い関係はピット、SK-033を切り、SX-002性格不明造構と近代の攪乱（第二次大戦中の防空壕か？原因者談）に切られる。検出面での平面形は長さ6.5 m以上、幅1.0 m程度を測る隅丸の溝状を呈する。検出面からの深さは0.25 mを測り、断面の形状は浅い逆台形を呈する。底部には15～20 cm程度の礫が疊らに敷かれていた。

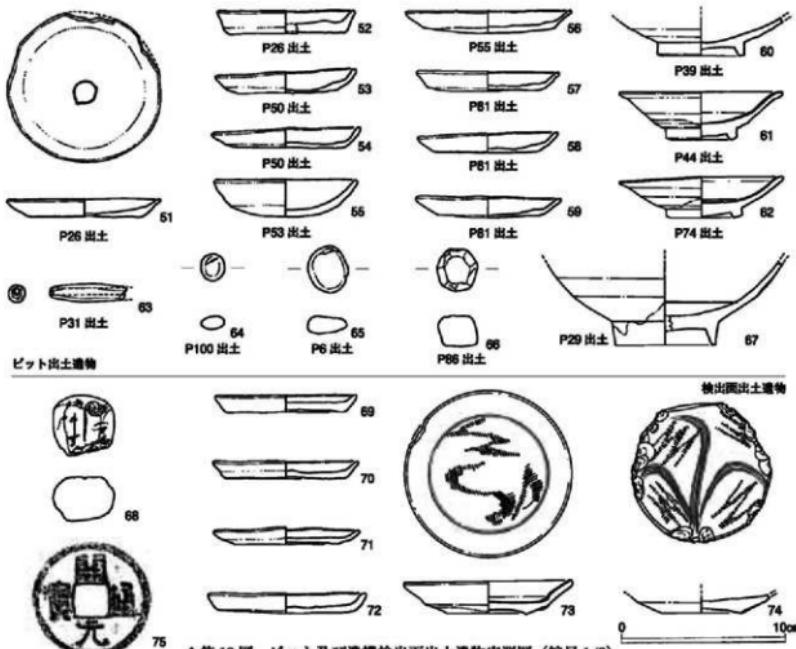
#### 出土遺物（第8図）

2は底部回転糸切り離しの土器器皿で、口径8.4 cm、器高1.1 cmに復元。15、16は白磁碗IV類の口縁部片。11は緑釉陶器瓶の口縁部細片。口縁部は八角形の花びらで、口径7.0 cm程度に復元。胎土は生成色を呈し、茶褐色細粒を含む。釉は多く剥落するが、色調は冴えた黄緑・純い緑みの黄・鶯色を呈し、三彩の可能性がある。

出土遺物から、SX-016の年代は13世紀後半代と考えられる。

#### （3）その他の出土遺物（第8、13図）

9は青白磁合子の蓋で復元口径5.0 cm、器高1.5 cm。甲に陽文、側面に蘭舟（36弁か）を配す。釉調透明度低く、色調は薄い緑みの青。10は青白磁皿で口径7.8 cmに復元。内器面全体に施文。釉調透明で、色調は薄い緑みの青。51～59は土器器皿で56のみ底部回転ヘラ切り離し、他は回転糸切り離しである。口径7.6～10.1 cmに復元。51はピット26の出土であるが、見込みのほぼ中央部に径1.3 cmの孔が焼成後に穿たれる。60～62は白磁皿のII・III類。63は管状土錠。64、65は石英製の基石と考えられる。66は瓦玉で色調は白～スカイグレイ。67は白磁碗V類。68～74は包含層の出土遺物。68は輕石製浮子で長さ3.7 cm、幅3.7 cm、厚さ2.7 cm。上面に2条の刻み目が入れられる。69～72は底部回転糸切り離しの土器器皿で口径8.6～9.6 cm、器高1.1～1.3 cmを測る。73は同安窯系青磁皿I-1-b類で見込みに「之」



▲第13図 ビット及び造構検出面出土遺物実測図 (縮尺1/3)

字形櫛描文を施す。74は同安窯系青磁Ⅰ-3・a類を転用した打模である。

### 3 小結

今回の調査で確認した造構は12世紀後半代以降の所産である。これまでの発掘調査の成果から、本調査区が立地する箱崎遺跡の西側緩傾斜面は12世紀後半代から集落としての利用が開始されたことが指摘されており、集落としての利用開始時期はこれに一致するものである。この時期の造構はSK-003、004、011等で、土師器の外底部は回転糸切り離しを主体とする。輸入陶磁器には、白磁碗IV・V・VI類、同安窯系青磁碗I-1類などが見られる。13世紀代前半代～後半代の造構はSK-017、SX-001、006、016等がある。土師器口径の小型化が進み、輸入陶磁器では龍泉窯系青磁碗I-5類が見られるようになる。これに続く14世紀前半代と考えられる造構は、本調査

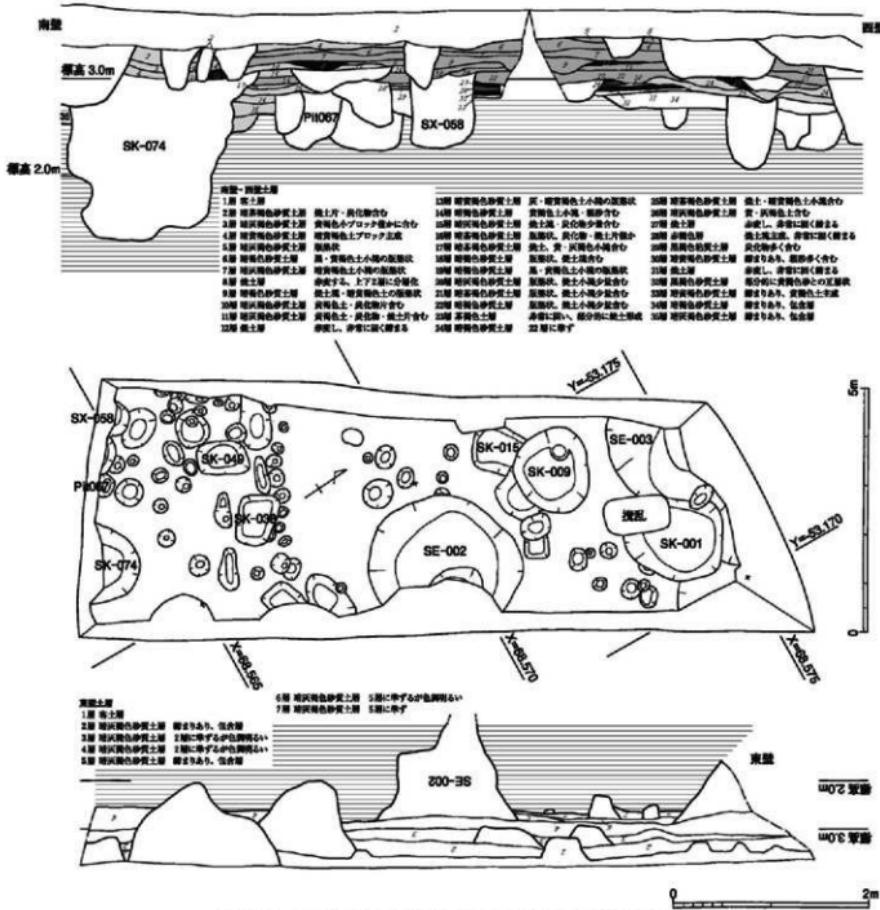
区では確認できなかった。14世紀後半代の造構と考えられるSK-025土壤は2層(標高3.0m付近)から掘り込まれ、13世紀代の造構群が掘り込まれる面(標高2.6～2.7m付近)との間に標高差があり、集落としての利用が一時期中断していたことを示すものと考えられる。また、本調査地点より北側の第11、31、32次調査地点で検出された13世紀後半代の焼土層は、元寇に伴う可能性が指摘されており、本調査地点におけるこのような状況も、元寇の戦場となった中世箱崎の集落の一次的な衰退の状況を示している可能性がある。この点については今後、他の調査地点の状況や出土遺物の詳細な検討を行いたい。

14世紀後半～15世紀代前半にかけての造構が掘り込まれる2層から上は、近現代の客土層であった。これ以降の時期を示す染付等の遺物は出土していない。門前町箱崎に形成された近世町家群との繋がりは、本調査地点では確認されなかった。

## 第4章 第31次調査の記録

### 1 調査の概要と基本層序

第31次調査区は、東区箱崎3丁目3358-1に所在し、箱崎遺跡の北端に位置する。南側の道路（箱崎阿恵線）を挟んで勝樂寺が隣接し、南側約600mには菖崎宮が鎮座する。本調査区の周辺ではこれまで、第10、11、25、32、34、35、36次調査が実施された。調査前の現状は個人専用住宅解体後



の更地であった。排土処理の都合上、北半と南半の調査区に分けて反転調査をし、北半調査区から発掘した。調査面積は都合 80m<sup>2</sup>である。

第 14 図下段は調査区の東壁土層を記録したものである。基盤となる砂層面は、調査区の中央付近で標高 2.85m、北東側で標高 2.65m、南東側で標高 2.55m、南西側で 2.7 m を測る。箱崎遺跡における基盤砂丘の地形復元図では、周辺の標高は 2.5 m 以上で、砂丘基盤は南側から北側に向かって傾斜している。本調査区の観察所見はこの復元図を支持する結果であるが、南東部の状況から砂丘に多少の起伏があった可能性がある。また、本調査地点は砂丘北側の傾斜面に立地すると考えられる。

東壁の基本層序は、その砂丘上面に暗灰褐色砂質土（7 層）、暗灰褐色（7 層に比べ色調明るい）砂質土（5、6 層）、暗灰褐色（他層に比べ色調暗い）砂質土（4 層）、暗灰褐色（7 層に比べ色調明るい）砂質土（3 層）、暗灰褐色砂質土（2 層）、瓦礫を含む近・現代の客土（1 層）が堆積する。土層観察で遺構の掘り込みは地山と 5、6、7 層を主体とし、標高 3.3 ~ 3.4 m 付近の 3 層から掘り込まれる遺構もあった。また、4 層から掘り込まれる遺構は観察されなかった。

第 14 図上段は調査区反転後、南半調査区の南壁及び西壁を記録したものである。南西側の層序は北東側と大きく異なり、焼土層とそれに伴う整地層を確認した。層序は地山（黄褐色砂層）の上に暗灰褐色砂質土（35 層）、暗褐色砂質土（34 層）、暗褐色砂質土層（33 層）の順で堆積している。これら各層と、ここから掘り込まれる遺構（ピット 67 等）の覆土は、焼土塊や炭化物を含まない。焼土層は 31、27、12、8 層の 4 層で、それぞれの標高は 2.85 ~ 2.9 m 付近、3.0 m 付近、3.15 ~ 3.2 m 付近である。これら焼土層と整地層は非常に固く締まっており、複数回の火災後に整地を繰り返し行った様子が観察された。

## 2 遺構と遺物

### (1) 井戸



▲第 15 図 南半調査区南壁及び西壁土層（東から）



▲第 16 図 北半調査区全景（南から）



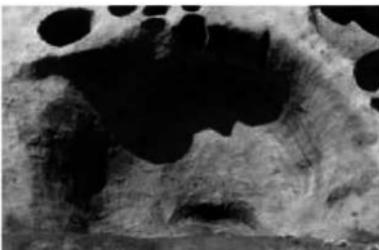
▲第 17 図 南半調査区全景（北から）

### SE-002 (第18、21図)

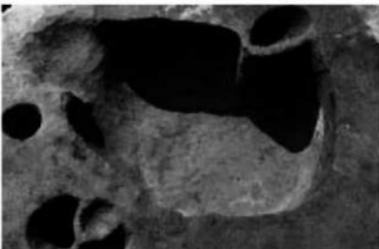
調査区のはば中央で検出した。東側は調査区外に延びて完掘していない。切り合い関係はピットを切るのみである。土層断面観察から、掘削面は東壁の5層で標高2.85mを測る。検出面の掘方は直径約3.2mの円形を呈すると推測される。比較的急傾斜で掘り込まれ、標高1.5m付近で直径2.1m程度の円形を呈すると考えられる平坦面を確保する。そこから更に掘り込みを行うが、標高0.8m以下は未掘である。裏込めの各層は比較的厚く互層状を呈する。

### 出土遺物 (第22図、23図上)

76、77は底部回転糸切り離しの土器皿で、法量は順に口径8.8cm、8.9cm、器高1.3cm、1.6cmを測る。胎土は概ね精良で、色調は黄褐色～橙褐色を呈する。78～80は底部回転糸切り離しの土器皿で、口径13.2～13.7cm、器高2.4～2.8cmを測る。胎土は概ね精良で、色調は黄褐色～橙褐色を呈する。81は白磁輪花皿で口径12.0cm、器高2.6cmに復元される。口縁部は外反する。施釉後底部の釉が掻き取られる。釉調の透明度が低く、色調は生成色を呈する。82は高麗青磁皿で、口径13.7cm、器高3.0cm、底径4.0cmを測る。器壁は薄く、口縁部は外反する。胎土は灰色を呈し、細砂を含む。全面施釉され、見込みと豊付に各3ヶ所の白色耐火土目が残るが、研ぎ出されていない。釉調の透明度低くピンホールが見られる。色調はセージグリーンを呈する。83は高麗青磁碗の底部片で、底径6.2cmに復元される。胎土は象牙色を呈し、白色・黒色細砂を多く含む。全面に施釉され、豊付の釉が掻き取られる。見込みに白色耐火土目が残る。色調はオパールグリーンを呈する。84は褐釉陶器皿で、口径11.2cmに復元される。内器面のみ施釉され、色調は内器面がトップ、外器面がタバコブラウンを呈する。85は同安窯系青磁皿I-2類、86は同I-1·b類である。色調は順に白緑、ベージュを呈する。87は龍泉窯系青磁皿I-2·b類で、色調はメロンイエローを呈する。88は龍泉窯系青磁皿I-6類で、外器面に細かい構造文の後、粗い蓮弁状の片彫りで施



▲第18図 SE-002 井戸検出状況（南東から）

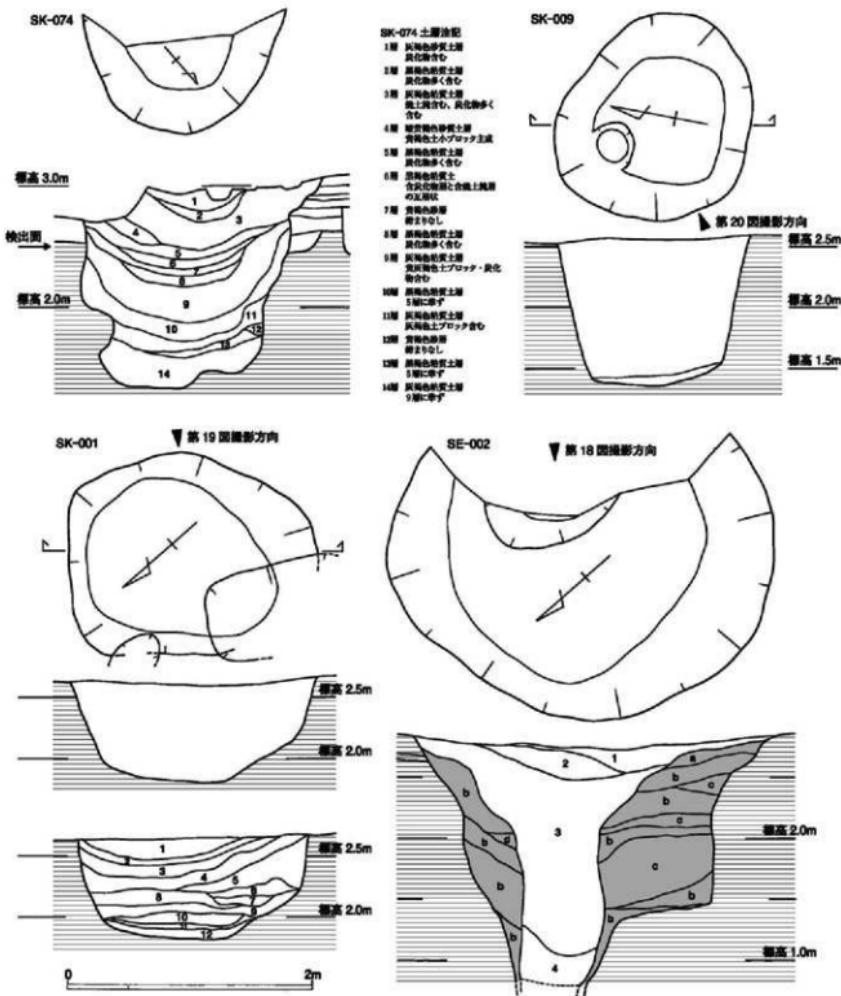


▲第19図 SK-001 土壌全景（南東から）

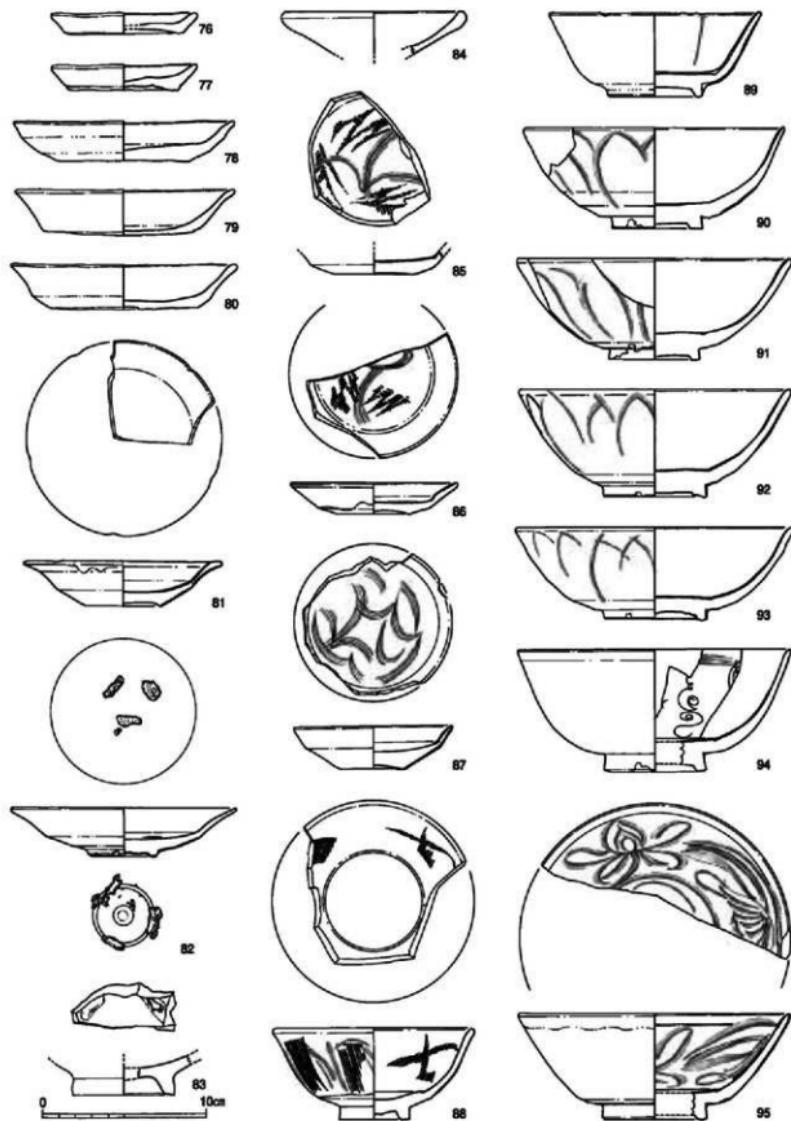


▲第20図 SK-009 土壌全景（西から）

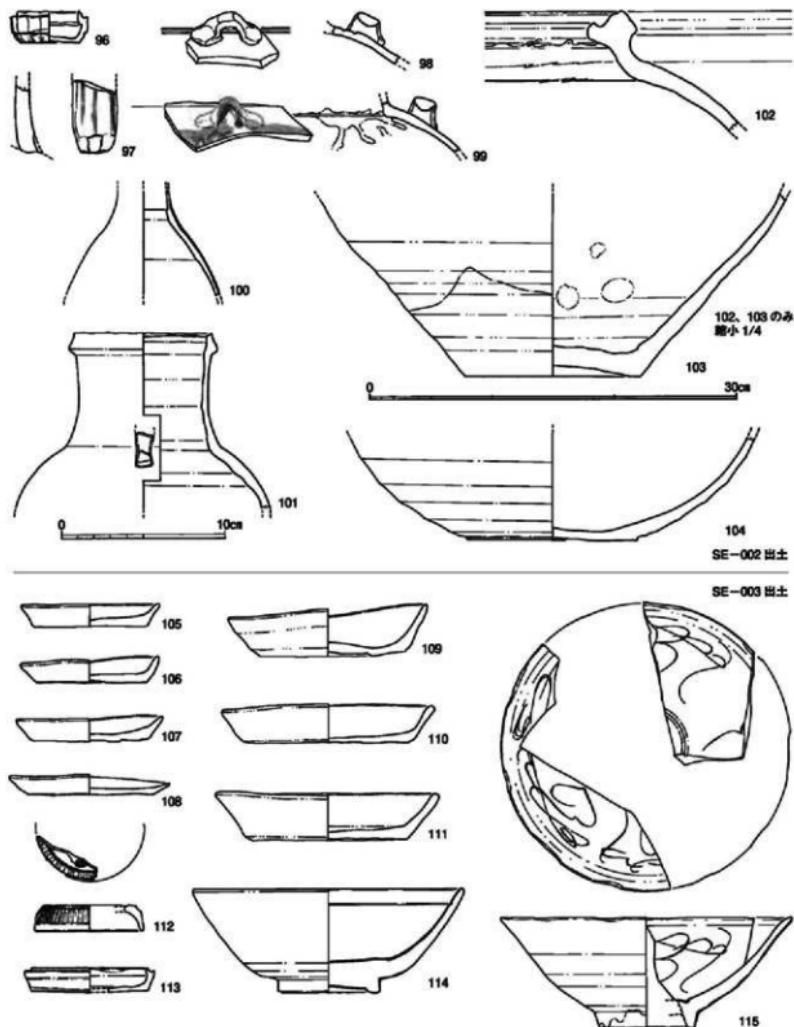
文する。内器面体部に細かい構造文を施文する。色調はベージュを呈する。89は龍泉窯系青磁小碗I-3類である。口縁部は輪花で、体部内器面に白色陰線による区画がある。厚く施釉され、色調はロビンズエッグブルーを呈する。90～93は龍泉窯系青磁碗I-5-a類で、外器面に退化した無鎖連弁文を施文する。色調はベージュ～セージグリーンを呈する。94は龍泉窯系青磁碗I-4類で、内器面に片彫りの飛雲文を施文する。釉調透明で発色は良好、色調はセージグリーンを呈す。



▲第21図 SK-001、009、074、SE-002実測図及び土層断面図（縮尺1/40）



▲第22図 SE-002井戸出土遺物実測図（縮尺1/3）



▲第23図 SE-002、003井戸出土遺物実測図（縮尺1/3、1/4）

95は龍泉窯系青磁碗I-2-a類で、内器面に蓮華文を片彫りする。色調はセージグリーンを呈す。

96は青白磁合子で、立上がり径3.6cm、径4.7cmを測る。側面に16弁の菊弁を配する。色調は

緑みの白を呈する。97は青白磁水注の把手片である。98は灰釉陶器四耳壺片で、色調は赤みの灰を呈する。98は黄釉褐彩陶器の四耳壺片である。100は白磁瓶で、色調は緑みの白を呈する。101は褐釉陶器の水注で、胎土の色調は茶色を呈し砂粒を含む。口縁部に目跡が残る。全体に二次的な被熱痕が認められる。102は施釉陶器壺の口縁部片である。103は黄釉陶器壺の底部である。104は褐釉陶器の鉢で、二次的な被熱痕が認められる。

出土遺物から、SE-002の埋没年代は13世紀後半と考えられる。

#### SE-003

調査区の北西端部でその一部を検出したに過ぎないが、検出面での形状や、二段に掘り込まれることなどから井戸と推測される。

#### 出土遺物（第23図下）

105～108は底部回転糸切り離しの土師器皿で、口径8.4～9.8cm、器高0.9～1.5cmを測る。109～111は底部回転糸切り離しの土師器壺で、口径12.4～13.6cm、器高2.2～2.9cmを測る。112は青白磁合子の蓋で、口径6.6cmに復元される。甲の周には菊弁を配す。色調はロビンズエッグブルーを呈す。113は白磁合子の身で、立上がり径7.0cm、径7.8cmに復元される。色調は緑みの白を呈する。114は龍泉窯系青磁碗である。115は白磁碗Ⅶ類で口縁部は輪花。色調はベージュを呈す。

出土遺物から、SE-003井戸の埋没年代は13世紀後半と考えられる。

#### （2）土壤

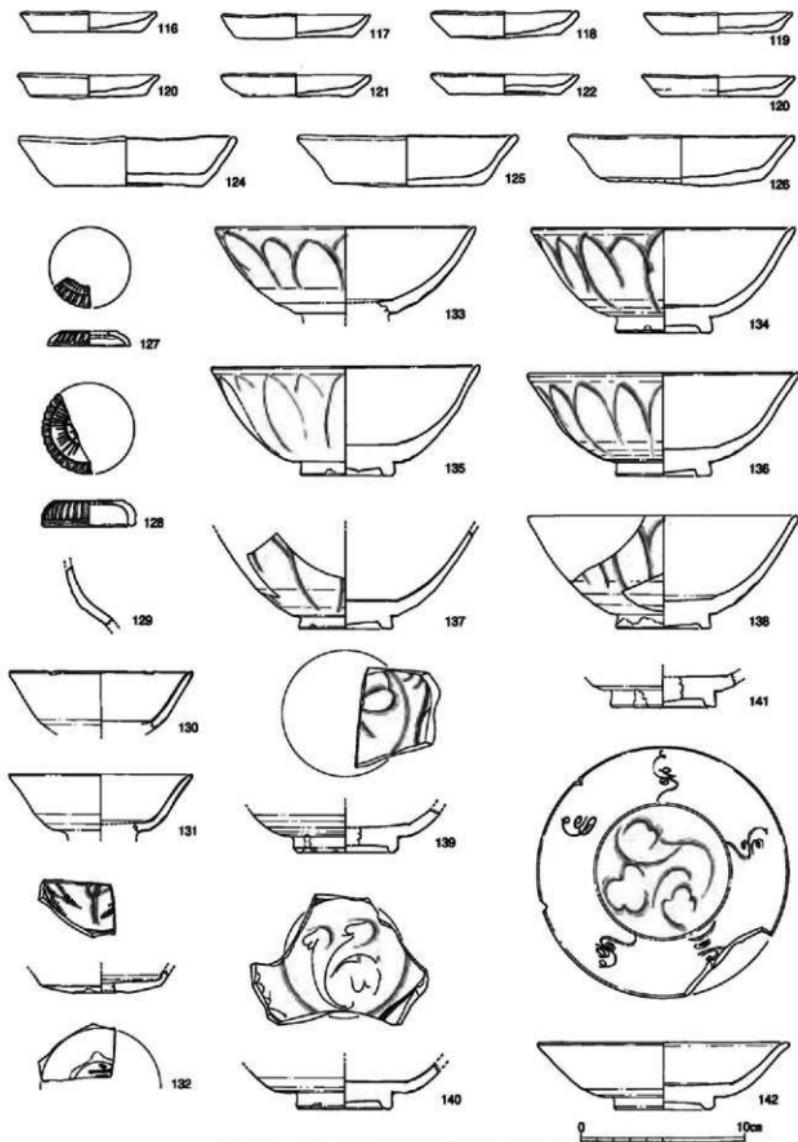
##### SK-001（第19図、21図左下）

調査区北東端で検出した。切り合い関係はSE-003井戸、SX-018、019性格不明遺構を切り、ピットと近・現代の擾乱に切られる。検出面での平面形は、長さ約2.0m×幅約1.6mを測る不整形な格円形を呈する。覆土は有機質腐食土と、粘土小ブロックや黄褐色砂を多く含んだ砂質土の互層状を呈しており、生活残滓を廃棄するための土壤と考えられる。検出面からの深さは約0.8mを

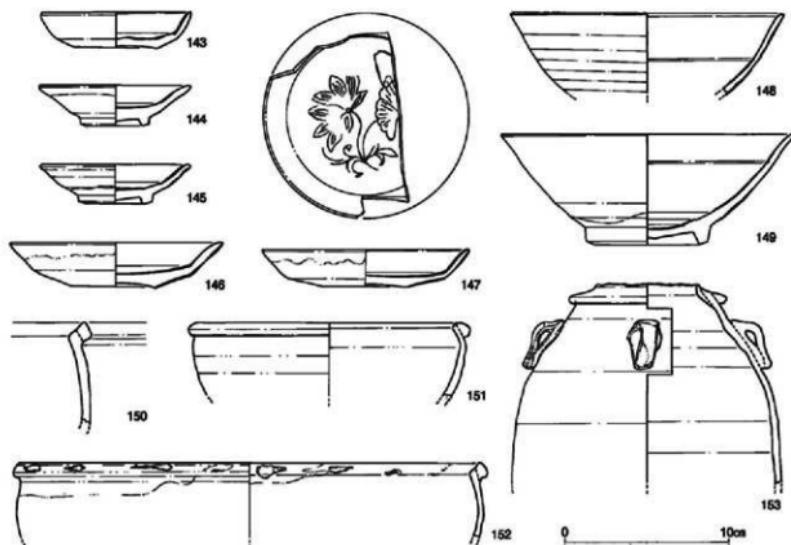
測る。出土遺物中に占める輸入陶磁器の割合が比較的高い。

#### 出土遺物（第24、25図）

116～123は底部回転糸切り離しの土師器皿で、口径8.5～9.3cm、器高1.2～1.5cmを測る。124～126は底部回転糸切り離しの土師器壺で、口径13.5～13.8cm、器高3.0～3.1cmを測る。127、128は青白磁合子の蓋で、口径は順に5.0cm、5.6cmに復元される。甲の圓線内に放射状の陽刻と、甲の周には菊弁文を配す。色調は順に白緑、オーバルグリーンを呈する。129は施釉陶器壺の肩部片で、色調は灰みの黄緑色を呈する。130は龍泉窯系青磁碗I-1-b類で、口縁部の輪花は5ヶ所に復元される。131は同じくI類であるが、小片のため輪花の有無は不明である。两者とも口径11.2cmに復元される。色調は緑みの明灰色を呈する。132は同安窯系青磁皿I-1-b類で、底部に墨書があるが、破片のため判読できない。133～138は龍泉窯系青磁碗I-5-a類である。137、138の胎土は粗く、黒色・茶褐色細粒を含む。他は概ね精良である。釉の発色が悪く、色調はベージュを呈する。139は龍泉窯系青磁碗I-2類か？胎土に黒色細粒を多く含み、色調はベージュを呈する。140は龍泉窯系青磁碗I-4類である。胎土は灰色を呈し、黒色細粒を含む。見込みに雲文を片影りする。色調はミストグリーンを呈する。141は青磁碗底部片で、色調はセージグリーンを呈する。142は龍泉窯系青磁皿で、高台を低く削り出し、口縁部が僅かに外反する。見込みに雲文を、体部内面に飛雲文を5ヶ所に配する。釉調は透明であるが発色悪く、色調はベージュを呈する。143～147は白磁皿である。147は皿-2-b類で、見込みに草花印文を施す。色調はベージュを呈する。148は白磁碗Ⅷ類。149は皿-2類である。150、152は磁灶窯系黄釉陶器の盤である。151は茶釉陶器の鉢である。153は褐釉陶器の四耳壺で、腹部最大径は16.4cmに復元される。口縁部が肥厚し、やや下方に突出する。胎土の色調は海老茶を呈し、精良である。口縁部内器面のみ露胎、他は薄く施釉し、色調は外器面が



▲第24図 SK-001 土壌出土遺物実測図 (縮尺1/3)



▲第25図 SK-001 土壌出土遺物実測図（縮尺1/3）

黄みの暗灰色、内器面がセージグリーンを呈する。される。色調はムーンライトブルーを呈する。160出土遺物から、SK-001の年代は13世紀後半代と考えられる。

#### SK-009（第20、21図）

調査区北半で検出した。切り合い関係はSK-015、021土壌を切る。検出面での平面形は、長さ1.6～1.8mを測る不整形な円形を呈する。検出面からの深さは1.8mを測る。

#### 出土遺物（第26図）

154は底部回転糸切り離しの土器皿で、口径8.6cm、器高1.2cmを測る。155、156は龍泉窯系青磁小碗I-1類である。156は口縁部の輪花は5ヶ所に復元される。色調はロビンズエッグブルーを呈する。157は龍泉窯系青磁碗で、見込みに「金玉満堂」銘印文がある。色調はベージュを呈する。158は龍泉窯系青磁盤で、見込みに魚文を片彫りする。色調はロビンズエッグブルーを呈する。159は白磁皿IX-1類で、見込みに草花文散らし、体部に雷文と花卉文が2段にわたり施文

160は白磁碗IX類である。161は褐釉陶器の四耳壺、162は茶釉陶器の鉢で、色調はトープを呈する。163、164は磁灶窯系黄釉陶器の盤である。163は見込みに鉄絵を描く。165は陶器の鉢である。

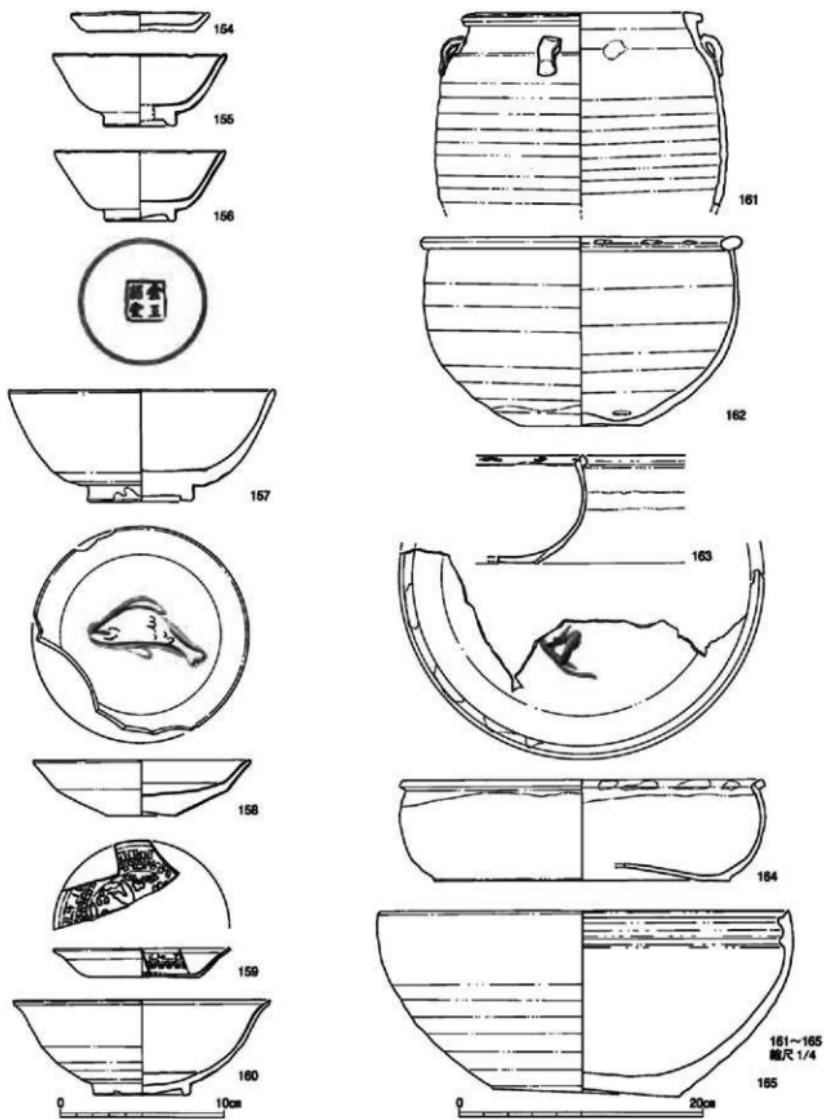
出土遺物から、SK-009の年代は13世紀後半代と考えられる。

#### SK-074（第21図左上）

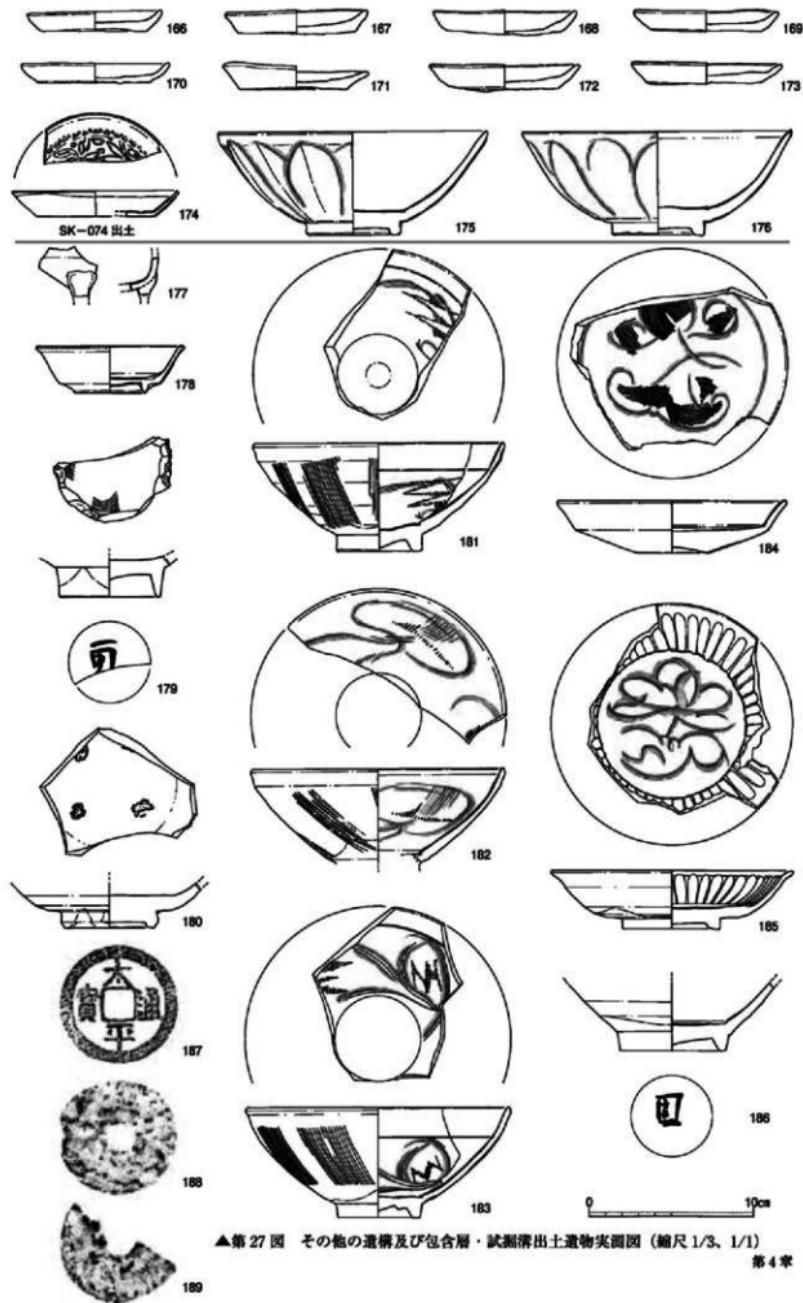
調査区南東端部で検出した。南壁の土層観察から15層（整地層）から掘り込まれていることが判明する。掘削面からの深さは、約1.7mを測る。覆土は有機質腐食土と、粘質土小ブロックや黄褐色砂質土小ブロックを含んだ砂質土の互層状を呈する。焼土小塊を含む層も観察された。

#### 出土遺物（第27図上）

166～173は底部回転糸切り離しの土器皿で、口径8.2～9.1cm、器高1.2～1.6cmを測る。174は白磁皿IX-1類で、見込みに花文散らし、体部に花卉文と雷文を配する。色調はムーンライトブルー



▲第26図 SK-009 出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/4)



▲第27図 その他の遺構及び包含層・試掘溝出土遺物実面図（縮尺1/3、1/1）

第4章



▲第28図 青磁輪花小碗（南宋龍泉窯156）  
Celadom small bowl with foliate rim (Song dynasty, China)  
復元口径 10.2 cm 器高 4.3 cm 底径 4.4 cm



▲第29図 青磁刻花文碗（龍泉窯 88）  
Celadom bowl decorated with lotus petal design (Song dynasty)  
復元口径 12.2 cm 器高 5.6 cm 底径 4.2 cm



▲第30図 青磁無輪蓮弁文碗（龍泉窯 135）  
Celadom bowl decorated with lotus petal design (Song dynasty)  
口径 16.5 cm 器高 6.7 cm 底径 5.8 cm



▲第31図 青磁無輪蓮弁文碗（龍泉窯 136）  
Celadom bowl decorated with lotus petal design (Song dynasty)  
口径 16.3 cm 器高 6.3 cm 底径 5.8 cm



▲第32図 「金玉滿堂」銘青磁印文碗（龍泉窯 157）  
Celadom bowl stamped with fortune Chinese letters (Song dynasty)  
口径 16.2 cm 器高 6.8 cm 底径 6.4 cm



▲第35図 青磁皿（高麗 82）  
Celadom plate (Koryo dynasty, Korea)  
口径 13.7 cm 器高 3.0 cm 底径 4.0 cm



▲第34図 青磁魚文皿（龍泉窯 158）  
Celadom plate decorated with a fishdesign (Song dynasty)  
口径 13.2 cm 器高 3.4 cm 底径 4.0 cm



▲第33図 青磁刻花文皿（龍泉窯 142）  
Celadom plate decorated with clouds design (Song dynasty)  
口径 15.4 cm 器高 4.1 cm 底径 6.0 cm

ルーを呈する。175は龍泉窯系青磁碗I-5・b類で、色調は緑みの明灰色を呈する。176は龍泉窯系青磁碗I-5・a類で、色調は鶴茶を呈する。

出土遺物から、SK-074の年代は13世紀後半代と考えられる。

### (3) その他の遺構と出土遺物

177は青磁香炉の脚部片である。胎土の色調は灰色を呈し、精良である。全面施釉され、釉調の透明度は低く、ピンホールは見られない。色調はセージグリーンを呈する。178は龍泉窯系青磁碗III-1・a類で、厚く施釉され発色は良好である。色調は緑みの明灰色を呈する。179は白磁碗V類を転用した巻打で、底部に墨書が見られるが判読できない。180は高麗青磁碗の底部片である。胎土の色調はオイスターを呈し、黒色細粒を含む。全面に薄く施釉され、細かい嵌入が見られる。見込みに白色耐火土目が4ヶ所残る。底部には赤色砂目痕がある。色調はペールを呈する。181～183は同安窯系青磁碗I-1・b類で、外器面に細かい櫛描文、内器面に「之」字形櫛描文と籠の片彫りで施文する。色調は183がメロンイエロー、他はセージグリーンを呈する。184は龍泉窯系青磁皿碗I-1・b類で、見込みに精緻な劃花文を施文する。ピンホールはないが、細かい嵌入がある。色調はセージグリーンを呈する。185は龍泉窯系青磁皿で、高台の断面は四角形を呈する。口縁端部は外反する。見込みに蓮華文を片彫りで施文する。体部には蓮弁文の彫り込み、色調はメロンイエローを呈する。186は白磁碗皿類で、底部に墨書される。「圓」もしくは「口」に「泰」か?。187～189は銅鏡である。187は北宋の「太平通寶」(初銅年西暦976年)で、背は無文である。他は腐食が進み判読不可能である。189は半欠する。

### 3 小 結

今回の調査で確認した遺構は、概ね13世紀代を主体とするものである。ピットや土壙の中には白磁や土器のみで、青磁を出土しないものもあり、これらの遺構が12世紀代に遡る可能性もある。

るが、出土遺物はいずれも細片で数が少なく不明確である。

周辺の第11次、32次調査地点等で検出された焼土層は、本調査地点の南西側でも検出された。焼土層及び整地層が形成される以前の遺物包含層(33層)は、外底糸切り離しの土器や白磁に加え、龍泉窯系青磁碗I-1類・I-3類・I-5・b類・I-5・d類などを含む。これらの遺物から、33層の形成時期は概ね13世紀前半代と考えられる。該期の遺構はピット等で、集落としての利用が開始された時期と考えられる。1節で述べたが、この後31層と27層の2つの焼土層が形成される。いずれも赤変し、非常に固く締まっているので、高温の熱を受けた様子が看取される。この2層の間に非常に薄い整地層が観察された。この整地層形成と同じくして、焼土層が確認されなかつた調査区北側に整地を行っており、北側へ生活の場を拡張した可能性が指摘できる。

2度目の焼土層形成後、この面でも遺構の掘り込みが行われているが、約30cm程度の整地が行われ、SK-074出土の龍泉窯系青磁碗I-5・a類から、この遺構の形成時期は概ね13世紀後半代とみて大過なからう。この面の直上で次の焼土層(12層)が形成される。12層上には更に40cm程度の整地が行われ、ピットや土壙が掘削されるものと考えられるが、この面や各整地層の面での調査は行っていない。

このように、最初の焼土層形成以前から、最後の焼土層形成までには非常に短い時間が想定される。第11次調査地点・24次地点・32次調査(未報告)で検出された焼土層は、概ね13世紀中頃～後半代と考えられており、今回の調査地点の焼土層の形成時期と一致する。また、二次的な被熱で器表が変色した陶磁器もみられ、複数回の大火灾が一帯を襲ったと考えて間違いかからう。

これら焼土層が形成された13世紀後半は、蒙古襲来の時期と一致する。これら焼土層が、文永・弘安両役の皆崎の大火と一致するかは、今後の面的発掘と出土遺物の詳細な検討を待ちたい。

## 報告書抄録

ふりがな	はこざき じゅうく						
書名	箱崎 19						
翻訳名	箱崎遺跡第 29 次・31 次調査報告						
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 813 集						
編著者名	松崎一介						
発行機関	福岡市教育委員会						
所在地	福岡市中央区天神一丁目 8 番 1 号 電話 092-7111-4667						
発行年月日	平成 16 年 (西暦 2004) 年 3 月 31 日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
箱崎遺跡 29 次	福岡県福岡市 東区箱崎三丁目	40131		33° 36° 58°	130° 25° 40°	20020401 20020426	80
箱崎遺跡 31 次	福岡県福岡市 東区箱崎三丁目	40131		33° 37° 3°	130° 25° 37°	20020509 20020614	80
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
箱崎遺跡	集落	中世	井戸 土壙 ピット	土師器 (皿・环)、青磁 (碗・皿・香炉) 白磁 (碗・皿・水注・香炉)、 青白磁 (皿・瓶・合子)、貢舶陶器 (盤) 茶點陶器 (碗)、綠釉陶器 (瓶)、 褐釉陶器 (碗)、土器、石器、 基石、南宋鐵			31 次調査区南西部では 13 世紀 後半代の純土層と整地層を確認。 短期間で厚さ約 50 cm の整地を行った。 元寇にかかるものか。

## Hakozaki 19

The Report of The Research of Burial Cultural Properties Fukuoka City Vol.813

(c) Fukuoka City Board of Education 31 March, 2004

Fukuoka City Board of Education

1-8-1 Tenjin Chuo-ku Fukuoka city, JAPAN

Edited and Published by Burial Cultural Properties Section

of Fukuoka City Board of Education

Printed by Uozumi Printing

No parts of this publication can be reproduced or copied by any means  
without prior permission of the copyright owner.

## 箱崎 19

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 813 集

平成 16 年 3 月 31 日

編集・発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目 8 番 1 号

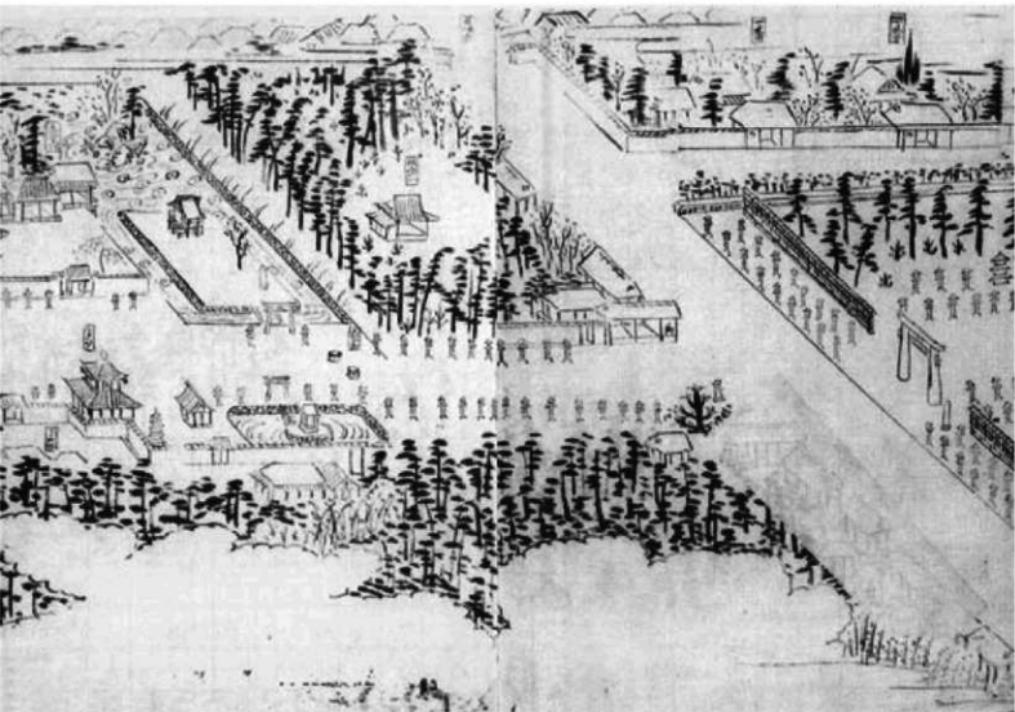
印 刷 魚住印刷

福岡市博多区大博町 8 番 20 号

# HAKOZAKI 19

The Report of Archaeological Excavation  
at HAKOZAKI Site; NO.29 and 31  
in Fukuoka City, JAPAN

The Report of the Research of Burial Cultural Properties Fukuoka City Vol 813



March, 2004  
The Board of Education  
Fukuoka City